



〈研究〉世界經濟の思想と其實現(3)

福田, 敬太郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 33(3):445-467

(Issue Date)

1922-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053475>



世界經濟の思想と其實現（其三）

福田 敬太郎

十

アダム・スミスは自由貿易を高唱した。然し彼は其實現を近き將來のイギリスに求めなかつた。貿易の自由がイギリスの天地に現はれることを期待するはオセアナカクトーピアかを樹立することを望むに等しき愚かさであると思つた。然るに彼の死後半世紀にして其クトーピアが出現したのである。第十九世紀前半は此クトーピアを産み出さんとする陣痛時代であつた。而して遂に相尋いで二兒が生れた。一は一八四六年の穀物法廢止であり、他は一八六〇年の英佛條約である。而して此出產に當つて助產手として功績顯著なるは人も知るリチャード・コブデンである。予は今、穀物法廢止の始末、英佛條約の交渉、或ひはコブデンの傳記を紹介しやうとは思はぬ。唯自由貿易運動に與はつた偉大なる「國際人」の活動の動機を探索し、又彼を中心として世界經濟の思想と實際とが如何ほど進展したかを回顧せんと欲する。

經濟史學上マンチエスター・スクールの名は甚だしく咀はれてゐるやうに見える。殊に攻撃的誇張の爲めに「スミシアニズムス」と「マンチエスタートム」とを同意義に曲解した場合には其咒咀

が遠くスミスにまでも及んでゐる。此はラッサルレの死（一八六四年）からアイゼナツハ會議（一八七二年）に至る間に於けるドイツ國家社會主義の成熟に伴ふ事實であつた。斯くてマンチエスター・スクールは世に誤解を以て迎へらるゝに至つた。廣告と宣傳は人を不具者にする。

マンチエスター・スクールの概念に包まれてゐる學說の根本思想には疑ひもなくスミスの力説した經濟的自由主義が横はつてゐる。然し乍らスミスの學說を敷衍し其れを實行に移すことのみがマンチエスター・スクールを形造るものではないのである。マンチエスター・スクールは決して一の類名ではなく歴史的觀念である。マンチエスター・スクールの本質を理解せんと欲せば第十九世紀前半のイギリスの經濟事情を背景としてリチャード・コブデンの人格を洞察せねばならぬ。蓋し歴史的意義を有するマンチエスター・スクールはコブデンに始まると觀るべきであるからである。

固より經濟的自由の實現に努力した政治家乃至運動家がコブデン以前に皆無ではない。「國富論」の感化を豊かに受けた宰相ピットを初め、トマス・ツークの指揮に由つて動いたロンドン商人、又エデンバラの商業會議所等夫々適當なる機會を利用してスミスの所謂ユトールビア實現に努めた。更にマンチエスターに於てもコブデンの來住するに先つて既に同じ方向への努力が試みられてゐた。即ち夙に一七九四年に建設せられた「商業協會」(Commercial Society)が一八二〇年に改造せられてマンチエスター商業會議所と成つて以來、保護廢止、制限撤廢を標榜して立ち、其は市内の有力實業家の共通の主張であつた。殊に穀物關稅廢止の要求は逐年盛んに成りつゝあつたのである。コブデンがマンチエスターに業務を開始したのは一八三二年、恰も此のランカシャーの中心が其工業

的勢力を充實し盡した頃であつた。

コブデンが社會運動家としての生涯に踏み出したのは實に彼二十八歳の時であつた。それまでは極めて平凡なる一介の更紗販賣人に過ぎなかつたが。此歳マンチエスターに自己の計算に於て更紗製造を始めると共に彼の「衷なる人」も著しく新に成り初めた。彼の最初の演説は兒童教育に關するものであつたと云ふ⁽⁴⁸⁾。爾來彼の心性の發展は目覺しきものであつた。彼の心に溢れたものは企業家精神よりも寧ろ社會政治的關心であつた。歐米諸方への旅行は彼の見識を高め觀察を深くした斯くて遂にコブデンは穀物法反對同盟の主將と仰がるゝに至つたのである⁽⁴⁹⁾。彼の眞摯は其忍耐を生み彼の熱心は其雄辯を産んだ。此等の資質は彼をして一方の盟主たらしめたのである。一八四六年穀物法廢止令の出るまでの「自由貿易の聖徒」としての奮闘は永遠に記憶すべく、コブデン・マドンナ⁽⁵⁰⁾の名も懐しい。何故にコブデンが此だけの力を現はし得たか。スミス以來の理神論的自然的的世界觀が果して此だけの實現力を持つてゐるか。スミス自らユトローピア追求である、考へたことを斯くも美事に成就し得たことは當に時勢の進展と言ひ過ごし得ないところのものを含んでゐる。成熟せる理神論的思想の子たるスミスが實現を斷念することは寧ろ當然であると同様にコブデンに依つて甚だ完全に實行に移されたことを當然なりとする理由を思想上に發見し得る。曰く、功利主義思想の影響之れである。

固よりコブデンに於ても理神論的傾向が無くはない。彼が少からず其感化を受けたところの骨相學者デューデ・コーム (George Combe, 1788-1868) に與へた一書簡はかなり良く彼の衷心を物語る

(51) 其一節に曰く、「幸ひ予は強烈なる論理的能力を有するを以て合理主義の途を失はずと雖も全然宗教的感情のみを以て動く人々と共働し得るところの宗教的同情を有す云々」と。彼は理神論的傾向を有することを自認し且つ理神論に於ける一特徴たる寛容を實行上に示した。予は信者達と争はず。蓋し彼等は一般に新約聖書の道德を基として活動せんと努め又少くとも志しつつある者にして君も亦其以上に出づる能はざればなり。ジョン・カルヴィンとデュー・コームとは異なる理論に基き異なる動機に倚り異なる前提に立てども其實彼等は同一の目的を認むるなり。されば予は孰れとも争ふと能はず。斯くの如き理神論的寛容が行爲の結果を重要視し、目的の效果に全體の重心を置くに至つて、此處に異なる傾向を見出し得る。即ち同じ手紙の一節に、「予は宗教的感情に對し深厚なる同情を有すと云へり。然れど予は消極的 (passive) 道德家にあらざる總ての道德家に同情する者にして、消極的道德家は尊敬し信賴すと雖も同情することは困難なり。殊に予は健全なる道德律の宣傳の爲め盡瘁献身する人々に同情す。然れども吾人の信仰に對して粗奔なる懷疑的言説を弄しつつ彼等の私的生活に於て新約聖書に見出さるる以上の善良なる規律を自己に加へざる者と伍することは予の感情に不快を覺ゆることを白狀せん。予の現實の公的生活は屢々予を斯かる輩の中に投じたり。而かも予は此等の佛人の所謂 *espirits forts* に何らの同情を有せず。予の格律は斯かる事柄に就ては神學的論議を避け (此處に於ても予の信心は因果律を征服しつつあり、且つボナバルトの忠告に従ひ、勇ましくも敬虔なりし母の信仰に執着せんと誓ふこと之れなり)、と叙べて居るのを讀む時に純粹なる理論的傾向から餘程離れてゐることを悟る。一面、嚴肅なる道德生活を尊重す

るところの清教主義の流れを偲ばせられるが、他面、積極的な實際生活を以て消極的なりと考へられる思索生活に優るものとするところの功利主義の影の映るを見ることが出来る。

十一

云ふまでもなく第十九世紀前半は功利主義の成熟期である。其時代に人と成つたコブデンが功利主義の影響を受けてゐることは怪むに足りない。けれども今特に此點に注意を求める譯は、自由貿易の實現が決してスミスからリカードに傳はつた純粹なる理論的自然法的自由貿易論に依らずして却つてペンタムがスミスから受けジェームス・ミルに傳へたところの功利主義的自由貿易論に負ふところ大であると考へるからである。勿論ペンタムはミルの精神的父であり、ミルは又リカードの精神的父であるが故に、リカードの精神に功利思想の成果が発見されないことはなく、逆に又ミルの「經濟學要義」はリカードの「原理」の入門書とも見らるべきほどのものであるから、ミルの經濟學説はリカードの其れと同じ思想に支配せられて居ると解することが出来るであらうが、予の此處に取扱はんとする自由貿易の理論に就て之を見るにスミスからリカードを経てジョン・スチュアート・ミルに至つて完成した自由貿易論と同じくスミスから發してペンタムを基とし父ミルを通りコブデン、ブライト等、即ちマンチエスター・スクールに現はれた自由貿易論との間には區別すべきものがあるのである。此も亦斷はるまでもなく子ミルは功利主義の白眉であるを以て其經濟學説の根底に功利思想の横はつて居ることを認めねばならぬが彼の國際貿易並に國際價値の原理の展

開方法は後に見る如く全然リカード的である。斯くて區別すべき二つの流れの一を呼んで理神論的自然法的自由貿易論とし他を功利主義的自由貿易論と云ふ。前者は正統派の貿易理論であり、後者は後に其力を勞働問題に集中するに至つた功利主義運動の一つの現はれである。即ち此處に於てマシエラス・ス・クルは功利主義運動としての自由貿易論の一と解せられる。然らば所謂功利主義的自由貿易論の内容を問はねばなるまい。

同時代の他の多くの學者と共にベントムも亦スミスの熱心なる信奉者であつた。彼は絶對の經濟的自由を求めた。「成年に達し健全なる思慮を有し自由に且つ眼を開きて活動せる人は、彼の利益の故を以て、金錢を取得するに當つて彼の適當なりと思惟する取引をなすことを妨げらるべきにあらず」と彼は信じた⁽⁵²⁾。彼は又「報賞の理論」の中に自由競争を謳歌し、「總ての産業に於て、又總ての技術に於て競争は公衆をして常に最廉の價格のみならず最善の仕事を獲得せしむ⁽⁵³⁾と説いた。同様の思想が彼の「經濟學袖珍」の隨所に現はれてゐる。「國富の總額を増加し、若くは生存又は享樂の手段を増加する目的を有する場合には、特別の理由なき限り、政府は何事も爲し又は企つべからざるを原則とすべし。此等の場合政府の執るべき標語は『靜かなれ』(Be quiet)とすべし⁽⁵⁴⁾。従つてベントムが自由貿易學說に耳を傾け進んで熱心に之を唱導したことは寧ろ當然である。彼はスミスから受けたところの自由貿易論を擁して立ち一切の駁撃を斥けて殆ど完成の域に進め、此處に自ら其實現の日を近づけたのである⁽⁵⁵⁾。此意味に於て一八二〇年七月ス・イン議會の議決せる非難すべき反通商的法律に關聯せる彼の意見を聽くに足りる⁽⁵⁶⁾。

以上の諸文獻に由つて我々はベンタムの經濟的自由主義、若くは狭く自由貿易論を窺ふことが出来るのであるが、此際見通すべからざることは、予が之を解して功利主義的自由貿易論となす理由であらう。以下之を概説する。

スミスの自由貿易論の根據は既に述べた如く理神論的世界觀である。國際的分業と國際的交換に依る諸國民の自然的調和と云ふとを樂觀して初めて貿易の自由が冀はれたのである。然るに之に反してベンタムの自由貿易論の根據は最大多數の最大幸福を目的とする功利主義思想である。全體の美はしき調和てふことよりも寧ろ大多數の利益てふことが問題と成つた。自由貿易制度は多數の諸國民に可能なる最大限の利益を齎すが故にこそ其れを可とするのである。故にスミスの場合には理論上完全なる自由貿易制度の下に於て不利益を蒙る何人も無かるべきに反し、ベンタムの場合には理論上完全なる自由貿易制度の下に於ても不利益を蒙る最小限の犠牲者は存在するのである。此れスミスの場合に完全なる自由貿易制度が一の理想としてのみ可能であると考へられた理由でありペンタムの場合には直ちに實際問題に移し得る可能性を有した理由であらう。蓋しベンタムに取つては、「經濟學は學問たると同時に技術」であつて、「其學問としての價值は其有效なる利益と方策、其技術に對する從屬に由つて定まる」ものである⁽⁵⁷⁾。即ち經濟學は同時に經濟政策であり且つ其れが主體である。何故に然るかと問ふならば、ベンタムは「功利の原則」(the principle of utility)に基くが故にと答へる。經濟政策の歸趣は富の最大量と人口の最多數とを生産することに由つて幸福の最大量を生産することである。貿易も亦此一手段に他ならぬ。其れ故にベンタムは最大多數の最

大幸福に逆行する場合には貿易乃至取引の自由を制限すべしとした。即ち生活必需品と國防品とに就ては、若し無限の自由を許すならば富者は飢饉に際し穀物を買占め強者は開戦に當つて武器を獨占するのであらうから、此れ大多數の最大幸福を齎らすものでない故取引の自由を制限すべきであると考へた⁽⁵⁸⁾。斯くしてベンタムはスミスと聲を同じうして自由貿易論を唱へたけれども彼等の思想的背景は全然其軌を異にしてゐるのである⁽⁵⁹⁾。

更にベンタムの自由貿易論を以て功利主義的なりと解して之をスミスの其れと區別する予の心は、スミスの世界觀を承け繼ぎたるリカードの經濟學を祖述しながらベンタムを精神的父と仰ぐジェームス・ミルの自由貿易論を考察することに、依つて尙は一層に明かなるであらう。言ふまでもなく彼の「經濟學要綱」のみから功利主義的自由貿易論を捕捉しやうとするならば失敗に終る。リカード若くは廣く古典派經濟學の模範的手ほどきと見られる本書には特別に功利主義的色彩は濃く現はれて居らない。固より彼は、「生産と交換の業務は其自身の軌道を擇ましむるやう放任するならば確かに社會に取つて最も利益あるものを選ぶとは」「説明を要せざる産業の法則」であると信じてゐたが⁽⁶⁰⁾此の如き單純なる發言に據つて予は彼を功利主義的自由貿易論者に列せしめはしない。

父ミルがベンタムの親しき友であり深く其感化を受けてゐることは子ミルも認めてゐるところである即ち父ミルは「偉大なる名聲を博して英人の中で倫理・政治及び法律上に於けるベンタム氏の一般見解を徹底的に理解し且つ大體に於て採用した最初の人であつた⁽⁶¹⁾」而して「當時のベンタム主義又は功利主義の宣傳に特殊の形相を與へたものは父の意見であつた⁽⁶²⁾」其父の意見は「後年所

謂哲學的急進主義の最初の宣傳者と成つた青年達の一小團體に特殊の色彩と特質と、與へた主要なる要素であつた。彼等の考へ方は、首領又は指導者としてペンタムに關係を持つてゐると云ふ意味でペンタム主義であつたのではなく、寧ろペンタムの見地と近代經濟學及びハートレイ流の形而上學との結合であつた⁽⁶³⁾のである。此處に近代經濟學といふ中には特にマルサスの人口論が加はつて居る。蓋し「マルサスの人口論はペンタム特有のどの意見にも劣らず」彼等の「旗幟であり又一致點であつた」。而して此點から予は、ペンタムとの關係に於けると同様に、父ミルはマルサスとの關係に於ても功利主義的であると云ふ。思ふにスミス並にリカードに現はれた理論的世界觀の下に於ける社會の完全性を否定する者としてのペンタムとゴッドウキン並に父マルサスに現はれた人間の完全性を否認する者としての子マルサスとは、同様の重要さを以て父ミルに受け入れられたのである。斯くの如く、言はば理想派に對する現實派に味方することに由つて父ミルは充分に功利主義的と言ひ得る。

加之、父ミルが特に功利主義的自由貿易論者であると考へられる理由は、彼が實際上貿易政策に關する卓越せる意見を掲げて時人に問へる態度にも存する。リカードが實際問題に關聯しては主として貨幣金融問題に觸るゝこと多かつたに反し、父ミルの最初の經濟論は實に穀物輸出獎勵金の不得策を論じて穀物貿易を支配すべき原則に及んだものであり⁽⁶⁴⁾、又彼がリカードと相知るの機縁を造つたものは實に、通商は國富増進の源にあらずとなす諸家の議論を駁したる通商貿易擁護論であつた⁽⁶⁵⁾。斯くの如く貿易と其自由とを力説して彼の經濟思想の實現を期した態度はペンタムが前述

の如くスペインの實際問題に觸れて同様の企てをしたことゝ同様である。

十二

既に前節に於てペンタム及びジェームス・ミルを通じて我々は功利主義的自由貿易論の發展を觀た。コブデンは實に此頂點に立つ人である。内に在つてはジョン・ブライトに助けられ外からはフレデリック・バスターの共鳴を受けてコブデンは一八四六年遂に第一の成果を獲得することが出来た。其れまでに達する間に彼の頭の中に段々と圓熟して行つたものは最大多數の最大幸福と云ふ功利主義的觀念に他ならぬ。屢々彼の自由貿易論を以て商人階級の特殊利益を辯護するものなりとし之を嘲つて *Calico millennium* と呼ぶ。固より彼は特に新興國アメリカに對立してイギリスの世界權を確立する爲めには自由貿易に由るべく従つて商人階級の力に、俟つべきことを看破せる先覺者の一人であるが、而して其限に於て貿易商人の代辨者たることを辭しないが、其れを以て終れりとするならば彼の面目を知るものと言ひ難い。即ち穀物關稅の廢止を要求することは、單に製造業者が外國品との競争に堪ゆるやう賃銀を低廉ならしむる手段ではなく、實に勞働階級自體の幸福の爲めである、とはコブデンが一八四一年八月二十五日議會に於ける處女演說に明言するところである

(66)

蓋し當時の勞働階級の情勢は日々に惡化の傾向を示してゐた。下層民衆の大半は迅速に頽廢し行き、賃銀は減少し、彼等の困窮と不幸とはイギリスの歴史上他に比較すべきものなき疾病と墮落と

罪惡とを産むに至つた。我が自由貿易の闘士は夙に之を問題として議會に於て又他の場所に於て屢々人々の注意を喚起したのである。而して彼は此等の悲惨なる事實を見聞して「此等の貧民が其下に勞働せる一切の不幸の底には食料獨占の存することを更に確信せしめられた⁽⁶⁷⁾」のである。社會的疾疢は實に必需品の制限獨占到歸因する。最大多數の最大幸福を實現する爲めには此根本的缺陷を補はねばならぬ。而して其手段は「即時に全部の穀物法廢止」を措いて他に無かつたのである。斯くの如くさしも峻烈なるコブデンの穀物法廢止運動の裏には熱憤なる功利主義思想が潜んでゐた。尙ほ其ことは次の一つの事實を通しても察せられるであらう。一八四一年九月十三日、コブデンはブライトを訪れた。恰もブライトは數日前愛妻を失ひて悲痛の頂に達し殆ど絶望の淵に身を投げやうとせる折であつた。コブデンは哀める友をうち眺め徐ろに口を開いた。「友よ。此瞬間に於てイギリスの國中に數千の家は饑餓の爲其妻、其母、又其兒女を失ひつゝある。されば今君の悲哀の最初の激發が過ぎ去つた時、予は君に予と共に來ることを勧める。而して我々は穀物法が撤廢せらるゝまでは決して休まないであらう⁽⁶⁸⁾。ブライトは此勸告を受け容れて立つた。此處に一切の機會を利用し禍を轉じて福となすところの功利主義的態度の現はれと共にコブデンの胸奥に存する社會的幸福への寄與の心がけが示されてゐる。

此功利主義的思想から國民的意識を超越せる「國際人」的態度が現はれ又其信するところが萬古不易の自然科學的法則の形で發表せられる。一八四六年七月四日、既に穀物法廢止の目的を遂げた後、コブデンは喜に満たされて言つた。「有史以來、道德的社會的見地よりして、自由貿易の原則

の樹立ほど人類の永遠の利益を増進するやう企てられたる出來事は他に無いと思ふ。予は金錢的見地から又はイギリスのみに適用される原則として自由貿易を云々しない。我々は今や其眞理に於て永遠なる又其適用に於て普遍的なる原則を樹立したのである。此は總ての國民に且つ總ての時代を通じて、常に商業のみならず世界に存する關稅の各項目に適用せられねばならぬ。而して若し我々の原則は眞理なりと我々の信するところにして誤りなかりせば其結果は久しからずして現はれるであらう⁽⁶⁶⁾。然し乍ら此言葉を讀んでコブデンの經濟法則が自然科學的法則の性質を有してゐるものであると速斷してはならぬ。リカードを初めジョン・スチュアート・ミルに現はれてゐる所謂自然科學派經濟學の萌芽が同様の勢でコブデンの自由貿易論にも生ひ立つてゐると考へることは甚だ不當である。コブデンが自由貿易論を以て古今に通じて悖らざる眞理であると唱へたことは、演繹的結論の不當の力説と云ふよりも寧ろ彼の衷に藏する熱憤の功利主義の精神の發揚と云ふべきである。斯くして第十九世紀前半に於て世界經濟は理神論的思想から功利主義的思想に移るに由つて其展開期に入つた。即ち從來のマーカンティリズムは根底から覆されてレッセ・フェールが實現し出した。而して予の注意を惹くところのものはレッセ・フェールの實現期と熱憤の功利主義の勃興期との一致せることである。之を當時コブデンの主張に共鳴し來つたバスチャの本國に於ける實證主義的精神の勃興と思ひ合はせて一八六〇年の英佛條約を觀るべきである⁽⁷⁰⁾。

一八四八年は第十九世紀の *annus mirabilis* であると云はれてゐる。經濟學史上中興の祖と崇められるジョン・スチュアート・ミルの「經濟學原理」が世に現はれた年である。第十九世紀後半のイギリスに於ける功利主義的運動の中心は自由貿易問題から離れて勞働問題に移つて行つた。「アルトン・ロツク」の出版は其分岐點に立つてゐる。斯かる時に於て世界經濟の思想と其實際は如何なる有様であるか。功利主義的自由貿易論は何時までも其支配權を有し得るものでない。ドイツ理想主義の風潮がイギリスに流れ込むと共に幾許もなくして其勢を失ひ初めた。カーライルのマンチエスター・スクール攻撃は此意味に於て興味深き事實である。世界經濟の思想的展開は此處に暫く行き詰つたかの如く見ゆる。ミルの國際貿易並に國際價値の原理はリカードの理神論的自由貿易論を補正整頓したものに過ぎぬ。其處に思想上何らの新し味をも見出し難い。唯々功利主義的自由貿易論の熱憤に由つて折角贏ち得たところの自由貿易の實現を永久に辯護する爲めには却つて理神論的自由貿易論の冷靜が適當して居る。然れば此故に正統學派の論理的峻嚴は其強味を失はざることを要する。此點から考へてミルの貿易理論は一瞥に價する。

リカードは國際貿易に由つて諸國が夫々の利益を受くることを認めたが、其利益が如何なる割合にて諸國間に分配せられるかに就ては言及して居らぬことは既に述べたところである。ミルの貿易理論に就ての考察は此未決問題から初まる。即ち貿易に由る生産力の増加の結果が如何なる比率に於て通商國間に分配せらるゝかと云ふことである。此問題に就てはミルは既に一八二九年頃に一論文⁽⁷¹⁾を草し、其根本思想は一八四八年の「原理」に於ても變ることがない。ミルは自らリカードの

觸れなかつた問題に干はることを明言した後、例を示しつつ説く(72)。

今假に十碼の羅紗の生産費が英にては十五碼の麻布の生産費に等しく、獨にては麻布二十碼の生産費に等しとする。然らば若し十碼の羅紗に對して十五碼の麻布を以て交換せらるゝときは英は何らの損得なく獨は全く利益を得る。若し二十碼の麻布を以てするときは獨に損益なく英のみ利益を占める。又若し十五碼と二十碼との中間の量を以てせらるゝならば利益は兩國の間に分配せられる例へば十碼の羅紗が十八碼の麻布と交換せらるゝすると英は各十五碼に對して三碼を利得し獨は各二十碼に對して二碼を收得することとなる。茲に於て問題は英の羅紗と獨の麻布と相互に交換せらるゝ比率を決定する原因は何ぞやと云ふことである。此は交換價值に關する問題に他ならぬ。

凡そ商品に對する需要額は價格の變動に應じて變化する。今假に羅紗十碼と麻布十七碼と交換せらるゝものと定める。然れば獨に於て羅紗十碼の價格は麻布十七碼の其れに相當する。而して此價格に於て見出し得る需要額を十碼の千倍とする。同様に英に於て此交換比率に於て丁度需要を喚起する麻布の量を十七碼の千倍とする。此假定の下に於ては兩國間の貿易は相互の需要供給を圓滿に合致せしむるであらう。然るに此假定が變じて英は右の交換比率に於ては麻布十七碼の八百倍のみを需要するに過ぎざるときは、獨の需要する羅紗十碼の千倍の支拂に相當せざること明かである。

従つて獨は羅紗十碼の八百倍を得るに過ぎない。若し残り二百碼をも得る爲めには麻布十七碼以上の高價例へば十八碼の申出をせねばならぬ。此の新しき價格に於て英が需要する麻布の量を十八碼の九百倍とする。他方に於て羅紗の價格の騰貴したる結果獨に於ける其需要は減退すべく例へば十

碼の九百倍になるとする。斯くして此交換比率の下に於ける兩國間の需要供給は適合する。更に以上の假定と反對に英が十に對する十七の比率に於て麻布十七碼の千二百倍を需要する場合を考へ得る此場合に於ては英は不利益なる地位に立ち麻布に對して高き價格を申出でねばならぬ。即ち羅紗の價格の下落となり其はやがて獨に於ける羅紗の需要を増加し、他方騰貴したる麻布に對する英に於ける需要は減退し、遂に需要供給が合致するに至る。

斯くの如く二國が二種の商品を交易するに當つて其交換比率を決定するものは各國消費者の有効需要に他ならぬ。斯かる有効需要は消費者の性質と境遇とに由つて一定し難いものであるから、從つて二種の商品の交換比率も亦一定し難い。唯々我々の知り得ることは其比率の變動に極限のあることであつて、一國に於ける兩種の商品の生産費の比率と他國に於ける其れとである。即ち上の例に就て云へば十碼の羅紗は麻布二十碼以上若くは十五碼以下にて交換せられず、此二十碼及び十五碼は交換比率の兩極限を成すものである。然れば貿易は此兩極限の中間の價格にて行はれ、兩國の間に分配せらるる利益の割合は事情に應じて種々に變化し一定するものでない。

以上は説明の便宜の爲め最も簡單なる場合を假定したのであるが、ミルは更に進んで（一）運賃の影響（二）數種の商品の交換（三）數國間の貿易（四）生産方法上の進歩の影響等、種々複雑なる事情を其假定の中に添加し行きつつ現實の貿易狀態の解説に努めてゐる。其展開の方法は全くリカード的である。然し乍ら此煩瑣なる構造を貫くにリカードと同様なる理神論的精神を以てされてはゐない。さればとてコブデンと同様なる功利主義的熱憤も此處に現はれてゐない。ミルの貿易理

論は云はば葉のみ茂れる無花果の樹である。とさへ思はれる。彼の裏に後の半世紀に美はしく開展した帝國主義的精神を見出さうと努めることも徒勞である。寧ろ彼は對植民地貿易よりも對佛貿易に多くの期待を持つてゐた。即ち貿易理論に關する彼の最初の論文の結末に於て彼はイギリスこそヨーロッパの中で國際貿易に由る利益を最も豊かに享受する國であると考へた。何となればイギリスの輸出品は世界的需要を有し價格の下落と共に迅速に需要の増加するところの所謂需要伸縮性の大きなものであるからである。然るにイギリスの植民地並にイギリスに原料を供給する諸國も亦イギリスに於て最も廣汎なる販路を有し且つ價格の下落と共に殆ど無限に其需要の増加する商品イギリスを輸出品とするが故に、此等の植民地及び諸國はイギリスと同等なる利益の分前を獲る爲めに激しき競争を續け得るから、世間の信ずるところとは反對にイギリスの對植民地並に原料輸出國の貿易は對ヨーロッパ諸國の貿易に比べて利益は多くない(73) 顧ふにミルの頭には未だ帝國主義的精神が宿つて居らない。斯くて世界經濟の思想史上ミルは功利主義的自由貿易論から帝國主義的通商論への轉機に立てる者であつて正統學派の最後の殿堂を築いたと云ふ功績以外に新しき何ものをも造り出さなかつた。

十四

啓蒙主義と理想主義、ペンタムとカーライル、リカードとラスキン、コブデンとセシル・ローヅマンチエスター・スクールと帝國主義、此對立の間に第十九世紀の英國國民の政治的經濟的思想が動

搖してゐた⁽⁷⁴⁾。而して第十九世紀後半のイギリスは大體に於てカーライルとラスキンの迎へられた時代であり、ドイツ理想主義の影響が現はれた時期である。此間に於て世界經濟の思想は帝國主義の新精神に刺戟せられて發展し、セシル・ローズの如きは代表者として其實現に努力した。第十九世紀の後半は實にイギリスの黄金時代であつた。彼女は完全に世界經濟の霸權を掌握し得た。

斯くもイギリスを偉大ならしめた力は何であるか。シュルツエ・ゲヅアーニッツはマンチエスタ―・スクールを評するとき、今日の社會主義と比較して、無理想にして自然主義的なることは兩者全く相等しと云つてゐる⁽⁷⁵⁾。斯かる無理想にして自然主義的なるものに對立して著しく浪漫的色彩を帶びて帝國主義が現はれた。セシル・ローズの理想は、コブデンの理想と對立して、全世界に散在する大英帝國の繁榮と云ふことに存した。此帝國主義的世界經濟の思想は、常にイギリスだけでなく、多くの文化諸國民を動かし、ドイツ、アメリカを初め、我國人にも偉大なる勢力を保ち來つた。「文化」を擴張せんとする「權力及商業政策」は帝國主義的世界經濟の思想の現はれに他ならぬ。帝國主義的理想の下に世界經濟の實際は著しき發達を示した。植民地の進歩、國際條約の整頓、海洋交通の發達と共に、各國の政治的社會的關係は密接となり、世界は漸次縮少し、各地方の有機的關係は益々強くなり、斯くの如き世界には最早や戰爭の慘禍起らざるべしとさへ想はしめるに至つた。斯かる時代の最後に我國も當然其鎖國主義を棄てて世界經濟團體に加入しなければならなかつた。實に嘉永六年は西曆一八五三年に當りセシル・ローズの孤々の聲を擧げた歳である。

イギリスの帝國主義は、然し乍ら、一方古きマールカンティリズムと區別すべく、他方ドイツ並に

アメリカの帝國主義と區別すべき特徴を保つてゐる。即ち其れは民主的基礎の上に立つてゐることである。民主的基礎を持つてゐない帝國主義は其自らの破綻を惹き起すに至る。世界戦争後の今日之を通觀するとき明確に認め得る。今現にイギリスは民主的・社會的基礎の上に帝國主義的世界經濟政策を實行せんと企てつゝある⁽⁷⁶⁾。又資本主義から社會主義への過渡に於ける新しきドイツも、國內に於て社會化の問題に苦しめられながら、更に對外的に大なる負債を荷ひ國力恢復の責任を感じて革新せる世界政策の理想を掲げ初めた。曩にイギリスの帝國主義に深き考察を運らしたシニルツエ・ゲヴァーニッツが、千九百十九年、諸外國及び中立諸國の少數有識者に對して發せる公開書に於て、平和と世界經濟の將來に就て己が意見を述べてゐる。我々は此溫健なる學者から靜かに戦後のドイツ國民が世界經濟者として人類の文化的關聯に寄與するところあらんとして樹てたる商業政策の新理想を聽かうと思ふ。即ち其論するところの要點を摘むと次の如くである⁽⁷⁷⁾。

凡そ如何なる國民と雖も一の國家を形造れる以上、其大小に拘らず、自國の必要に應ずるところの經濟を樹立する權利を有する。決して商業政策的専大主義なるものは存在すべきでない。蓋し如何なる國民も他の國民の手段ではなく、各國民は孰れも自己目的である。時によつては保護關稅の如きものを設けて幼稚なる産業を助勢する必要がある。此點に於てドイツは既に其實例を示し且つ其効果を收めて來たが、此ことは今後、アイルランドにも、エジプトにも、英領印度にも當て簞まる。實にフリードリヒ・リストは世界的預言者である。然し又何何なる國民と雖も世界經濟團體の一員としての一外國を他の外國よりも惡き條件で待遇してはならぬ。總ての國民に對して平等の權

利を與へねばならぬ。此れ即ち最惠國約款の精神であり、又國際聯盟の根本法則と成つてゐるところである。最惠國約款の根本精神は、常に商品のみでなく、人格にも即ち商業旅行人・外國商人・外國會社・外國人勞働者にも及ぶべきである。總ての外國人は内國人と對立して何らかの制限を加へられる場合に常に同様の取扱を受くべきである。

ドイツは世界貿易の確實なる進歩を冀ふ故に從來の敵味方兩方に對して慎重なる基礎の上に永續的關稅協定を行はんことを望む。固より多くのドイツ産業の自由貿易可能性を斟酌し、又ドイツの小經營的農業を保護する必要があることを考慮するは言ふを俟たない。即ちドイツは國際的關稅の障壁を全然排除することを望むものではなく、其低下と其協定的確立を望むものである。關稅政策の前提として又其補足としてドイツは勞働者保護協約を要求する。此れ一八九一年のエルフルト綱領にも現はれてゐる精神であるが、低廉なる賃銀、長き勞働時間、勞働者の貧困は國際的競争の武器と見做されるものであるから、ドイツは特に八時間勞働制の國際私法的確定を望む。ドイツは此點に於てイギリスの勞働者を有力なる仲間とする。彼等は實に自由貿易思想と勞働者保護思想とを其父祖から繼承して居り、早晚全イギリスの中耳を執るに至ること明かである。

次に一民族が他の民族の支配を受けることは、自ら統治し得ざる民族、特に熱帶植民地、就中アフリカに於て原則として認められる。即ち彼等の間には民族的文化進まず、従つてリストの意味に於ける國民經濟的發展に達してゐない。此等の方面に就てドイツの要求するものは門戶開放の原則である。詳言すれば此等の地方に於ける關稅は財政的目的を以てのみ徴收せらるべきであつて、徴

收に就ては決して母國の利益に偏することなく、總ての國々に平等に行はるべきである。此は從來イギリス並にドイツの植民地に於て行ひ來つたところである。若し同じ原則がフランスに由つても以前から實行せられてゐたならば世界的紛糾は餘程減じてゐたであらう。

以上はシニルツエ・デヴァーニッツの議論の要點で、聊かドイツを辯護する節々もあるが、大體に於て最惠國約款、門戸開放など經濟的機會均等主義を以て世界經濟的理想としてゐることが判る而して彼は自分の主張する精神と巴里經濟會議に現はれた精神とを比較して、一は過去の遺物たる狹隘固陋なる權力政策であつて戰後の經濟戰を醸すものであるとし、一は國民の自律と人類のソリダリテートとが一致するところの高遠なる自由政策であつて、此理想を以てのみ現代の不調和から眞の人類間の利益調和に進み得、過去の經濟的混沌から地球を理性的に取捲くところの世界經濟と云ふ統一的なる秩序が出現し、カントの所謂「永久の平和」、マルクスの所謂「自由者の國」が來ることを確信してゐる。

更に他の一人カール・フォン・テイスツカは相互了解の精神に基く世界經濟の新設を高唱する(78)彼の主張する世界經濟政策を理解するには先づ自由貿易の概念を根本的に改造してかからねばならぬ。即ち從來の自己中心的帝國主義思想から脱せる自由貿易であつて、啻に外國品排斥關稅や輸出獎勵金の廢止を含むばかりでなく、既にコブデンの主張したことのある戰時に於ける海洋の自由の確立、及び自國の貿易を擴張する爲めの一切の權力的威壓的手段の廢止をも含むものである。即ち特殊階級・特殊政黨の利益から經濟政策を樹てず、全國民の立場から各國の相互理解を基礎として

世界經濟政策を樹てることがテイスツカの理想である

斯くの如く戦後のドイツが國歩艱難のうちに新しき世界經濟の思想を樹てゝ進んでゐるが、其處に現はれたる經濟的機會均等、門戶開放、海洋自由、經濟戰防止の諸思想は國際聯盟にも存在してゐる。即ちウキルソンの提出した十四條の第三條、又國際聯盟規約の第廿三條は實に新しき經濟的國際主義を示してゐるのである。今や國際的關係は單純なる政治的規約に止らず、深き經濟的討議に入らねばならぬ。數年來數々開かるゝ諸種の經濟會議の外に、國際商業會議所の活動も漸く盛んにならうとしてゐる。

註釋

- (48) John Morley, *Life of Cobden*. I. p.26.
- (49) 穀物法を中心とした事柄に就ては飯島幡司氏の論文「英國穀法史論」(本誌第廿四卷五號六號及第廿五卷一號所載)殊に其前半を一讀せん。
- (50) 此は一の *souquet* である。第十五世紀末の凶作に際して穀物税を輕減せるを記念せるウエニスの一宮殿にある大理石の浮彫に一八四七年旅行の途上コンナムンが署名をしたところから起る。J. A. Hobson, Richard Cobden. *The International Man*. p.388.
- (51) Dated Aug. 1, 1846. [cited in Morley's *Life of Cobden*, pp.216-218]
- (52) Works of Jeremy Bentham published by John Bowring. Vol. III. *The Defence of Usury*. p.3.
- (53) Works Vol. II. *The Rationale of Reward*. p.228.
- (54) Works Vol. III. *Manual of Political Economy*. p.38.

- (55) *ibid.* p. 62, p. 64, p. 65.
- (56) *ibid.* pp. 85—103.
- (57) *ibid.* p. 33.
- (58) *ibid.* p. 71.
- (59) 予はスミスとベンタムとの間には其世界觀に大なる差異あることを發見してゐる。(其れは他日スミスの神學並に倫理學を考察するに當つて明かにするであらう。)従つて彼等を外形上の事は別として、何らかの點に於て共通的に見ることが予に取つて不都合に感ぜられぬ。此意味に於て予は堀經夫氏の篤實なる學說史的考察に現はれる結果の一部に同意し難い點を持つてゐる。即ち其れは氏自ら怪みながらもスミスを以て功利主義者なりと解し、彼をベンタムと殆ど同列に伍せしめたことである。ヒューム及びマルサスに就て予は此處一敢て問はない。(經濟論叢第十四卷五號・六號・第十五卷一號所載「堀經夫氏 功利主義と生産政策」參照。)
- (60) James Mill, *Elements of Political Economy*, 2nd Edition, London 1824, p. 195.
- (61) 今泉・石田兩氏共譯「ミル自叙傳」七八頁。
- (62) 同書一四五頁。
- (63) 同書一四九頁。
- (64) An Essay on the Impolicy of a Bounty on the Exportation of Grain and on the Principles which ought to regulate the Commerce of Grain, 1801. 此は稀觀小冊子である。予は未だ之を見ざる。
- (65) Commerce defended: an Answer to the Arguments by which Mr. Spence, Mr. Cobbett, and others, have attempted to prove that Commerce is not a source of National Wealth, 1807.
- (66) Speeches on Free Trade by R. C. Aug. 25, 1841.
- (67) *ibid.* Aug. 25, 1841.

- (68) Roger. Public Addresses of John Bright, pp. 354—366.
- (69) Speeches on Free Trade, p. 201.
- (70) ベスチャム中心とするフランシスの事情は此處に深く立入ることを控える。尙ほコフデンに就ては國際平和運動の方面から彼の無干渉主義を考察すべきであるが此處には觸れない。
- (71) Essays on Some Unsolved questions of Political Economy, London 1844. Essay I. Of the Laws of Interchange between Nations; and the Distribution of the Gains of Commerce among the Countries of the Commercial World.
- (72) op. cit. p. 7 eq. 尙世 Principles edited by Ashley, p. 584 seq. (參照すべき)。
- (73) op. cit. pp. 45—46.
- (74) Schulze-Gaevernitz, Britischer Imperialismus und englischer Freihandel, Leipzig 1906. S. 69.
- (75) op. cit. S. 72.
- (76) 大英帝國の經濟政策(神戸高等商業學校商業研究所彙報第七號)
- (77) Schulze-Gaevernitz, Des Frieden und die Zukunft der Weltwirtschaft, Zürich 1919.
- (78) Carl von Tyska, Vom Geist in der Wirtschaftspolitik, Jen. 1919.

目 次

- (一) 問題。(二) デヴィッド・ヒューム(三) 神 世界觀。(四) フイシオクラシー。(五) アダム・スミス(其一二)。(六) アダム・スミス(其一二)。(七) アダム・スミス(其一二)。(八) ショーン・レイ。(九) デヴィッド・リカード。(十) リチャード・コフデン(一一)。(十二) 功利主義的自由貿易論。(十三) リチャード・コフデン(其一二)。(十四) ショーン・スチュアート・ミル。(十五) 國主義から經濟的國際主義まで。

(完結)